研究対象は，5年一貫看護師養成課程専攻科の臨地実習の指導過程における教員自身の認識と表現である。

研究方法は，先ず臨地実習において，教員が指導の必要性を認識し，教員が関わることによって，学生が変化した場面および学生が関わった患者に良い変化があらわれた場面を，系時記録およびプロセスレコードに再構成し，資料とした。各場面を精読して，どういう指導過程であったのかを，指導過程の原基形態にそって「場面の特徴」をとり出し，それらを研究目的に照らして研究素材として選定した。次に，各研究素材を精読し，キーセンテンスを押さえながら「この場面の《学生の特徴》をみてとった《教員の認識および表現の特徴》」をとり出し，そこから《指導のポイント》をとり出した。さらに，それらの共通性と相異性を比較検討しながら，臨地実習における【指導指針】を導き出した。

研究結果：研究素材は，２事例３１場面であった。研究素材から抽出した《指導のポイント》は４５項目であった。それらを精読し，共通性，相異性を比較検討し，以下の７項目の指導指針を得た。

【指導指針】

1　学生が患者と関われない時には，患者のもとへ行き関われる状況をつくりだす
2　患者との関わりが進みはじめた場合には，さらに円滑に進むような状況をつくり見守る
3　看護に必要な情報収集とその整理ができていないと思った場合は，教員がつかんだ情報とのつきあわせを繰り返し行う
4　学生の行動が不十分と見た場合は，教員が援助のモデルを示しつつ教える
5　看護の方向性を出してきたときには，丁寧につきあわせをしつつ後押しする
6　患者にとって援助の効果が認められた場合は，患者の立場にたって評価を促す
7　学生の良い行動を認めた場合には，学生の表現しやすい状況を作り出してくみとる

療養環境の調整により患児の健康状態の好転をみた病棟看護管理者の判断過程

小澤かおり（基礎看護学）

【キーワーズ】　療養環境の調整・認識の発達・看護管理者の判断過程・看護の専門性・医療チームの協働

本研究は，病棟の師長である看護管理者が，ウエスト症候群で入院した患児の，反応の鈍くなった様子に気づき，療養環境を調整するという看護方針を定めて，病棟の各専門職者と協働した結果，患児の健康状態が好転した事例を分析し「入院患児の成長発達を妨げず促していくには何をどのようにみればよいか」「医療チームの協働において他の専門職者にどのように看護の専門性を表現すればよいか」を明らかにした上で，看護管理実践上の指針を得ることを目的としている。

研究方法は，患児が入院生活を送った150日間の中で，看護管理者が患児・家族・保育士・医師・担当看護師との関わりで，印象に残った場面をフィールドノートに記述していたもの，及び諸記録をもとに研究資料を作成し，研究資料を精読して，看護管理者の関わりが患児の健康状態の好転に影響したと思われる局面を取り出し，各局面の看護過程の意味，看護過程の発展過程の構造，看護管理者の認識の特徴と認識の構造を抽出した。

これらの分析結果から「入院患児の成長発達を妨げず促していく着眼点」と「医療チームの他の専門職者への看護の専門性の表現の特徴」を明らかにし，看護管理実践上の指針を導き出した。以下に結果を示す。

1　看護管理者は保育士を含む看護チームメンバーが，小児の成長発達を「からだのつくられかた，こころのつくられかた，人間関係のありかたが連関したプロセス」として健康がつくられていく事を基盤に，みつめられるようにする。
2　看護管理者は，保育士を含む看護チームメンバ

ーが，乳児期の神経ネットワーク形成の特徴を，外界からの刺激を すべて取り込んで活発にのび，絡み合いながら整理していく事，また，神経ネットワークは，外界からの刺激によって強化され，使われなければ弱化し，消えていくという特徴を前提に，乳児を観察できるように関わる。

3　看護管理者は，看護職者が患児の成長発達を妨げているものの見つめ方として，病気やその病気を診断する検査や治療によって避けられない症状・苦痛か，看護の不足によるものか，その双方か，をみきわめ，事例の構造を，健康な状態と比べ解決すべき対立は何か，それは解消または調和のいずれかを定められるように支える。

4　看護管理者は，療養環境の調整（五感刺激を送る）によって，患児の成長発達を促す看護の専門性を認識し，患児の入院時から，その患児固有の健康状態に適した看護方針を定め，他の専門職者の専門性との区別と連関を頭において，相手のこころが動くように表現し，医療チーム合意のもとで方向性を定め，協働を促進するプロセスを調整する。

5　看護管理者は，自己の看護過程・看護管理過程を客観視し，その判断過程を他の看護職者に表現し，看護が入院患児の健康を守る環境調整の責任を持っていることを自覚する。

妊産褥婦とその家族の認識と行動に変化を起こす助産師の援助とは
－熟練助産師の保健指導場面の分析より－

錦織浩子（応用看護学）

【キーワーズ】　妊産褥婦・熟練助産師・保健指導・対象の変化・援助

【本研究の目的】熟練助産師の保健指導場面から，対象（妊産褥婦とその家族）の認識を変え，良い変化を起こすことのできた助産師の判断過程と援助の特徴を知ることである。

【研究対象】一助産所における熟練助産師の「妊産褥婦とその家族の認識と行動に変化のあった」保健指導場面の援助の過程と助産師の認識である。

【研究方法】６事例７場面の保健指導場面を再構成し，研究素材とした。次に，分析フォーマットを用いて，事例A～Fのおのおのの局面において「助産師の判断とかかわり」「かかわりの看護的意味」から「局面の特徴」を35取り出した。この35の「局面の特徴」を精読し，共通性と相異性の視点から整理して，８項目の「助産師の判断過程と援助の特徴」を取り出した。次に６事例７場面の援助の流れを，時間的な経過を追って整理し，「助産師の援助の流れの特徴」を９項目目として取り出した。

《取り出された助産師の判断過程と援助の特徴》

1　現在の情報を元に対象の像を描き，その援助を行いながら，さらに正しい像を求めて情報を得て，常に全体像を修正しながら，より適切な援助を行っている。

2　妊産褥婦や児の成長について，専門職として，一般性を頭において対象に面し，時間的な視野の広がりをもって，看護上の起こりうる問題を正しく予測しつつ，その解決を図る方法を適切に判断している。

3　妊産褥婦とその家族の個別性を把握し，起こりうる問題の予測をしつつ援助を行っている。

4　妊産褥婦の生活を描き，問題解決の方法を生活に即し具体的に示し，働きかけている。

5　妊産褥婦の身体感覚に働きかけることによって，対象は心を開き，看護者の働きかけに応じて，認識の変化を起こしている。

6　妊産褥婦の情に働きかけ，家族への愛情を自覚させ，喜びを喚起するようにかかわることによって，対象が心を開き，援助が受け入れやすくなっている。

7　妊産褥婦やその家族が，身体の仕組みを理解でき，自分でコントロールできるようにかかわることで，安定した気持ちになり，やる気になっている。